

リモ女 ☆ 演劇部

ユキ 三船 雪

女優に憧れる演劇少女。

ツムギ 木村 紬

小学校時代、有名子役だった。

リン 稲葉 凜

宝塚的美人でファンクラブがある人気者。

ココハ 加東 心春

メガネっ子の変人、占い好き。

チアキ 千秋 芽生

歌って踊れる女芸人を目指している。

エマエマ 仲代 絵麻

声優志望のアニメオタク。

キーコ 宇津井 季子

学校に内緒でグラビアモデルをやっている。

ハナっち 宮口 はな

体操部出身の体育会系少女。

リオ／部長 志村 莉緒  
演劇部部长。

## リモ女 ☆ 演劇部活動中！

作／演出 入江おろば

客電が落ちていき、BGが上がりカットアウト。  
完全暗転になって、SE遠くで鐘の音。

### ○ オープニング

学園長先生の声「聖リモネール学園高等女子部、演劇部部长に、志村莉緒さんを任命します」

OP曲がかかり、  
明かりがつくと板付きで9人の制服の部員たち。  
歌とダンスのステージング。

各キャラの特徴、関係性を歌中で。  
ユキは明るく、ツムギは少し影がある。対照的な2人は仲良し。  
リン、宝塚のような華麗さ、周りは拍手してうっとり。  
ココハ、タロットカードを引いて、誰かを占う。  
チアキ、マイムも入れたコミカルダンス。  
エマエマは、声優アイドルのように。  
キークは、ちよっとお色気ダンス。  
ハナっちは、アクロも取り入れたものを。  
部長、ソロでは緊張してしまう。

全員手作り感満載なパネルを持つ。  
部長が指図、間違ったりして、最後☆を持った部長が入って完成。

【リモ】	ユキ	苺
【女】	ツムギ	苺
【☆】	部長	蜜柑
【演】	リン	苺
【劇】	ココハ	蜜柑
【部】	チアキ	桃
【活】	エマエマ	桃
【動】	キーク	桃
【中！】	ハナっち	蜜柑

暗転。  
SE放課後のチャイム。

① 母組の教室

SE教室のざわざわ。

ユキとツムギが椅子に座っている。

机には鞆。奥にはリンが本を読んでいるフリで、二人を見ている。  
コロナ蔓延している中での授業、生徒は透明マスクをしている。

ユキ、大きく伸びをする。

ユキ 「終わったー」

ツムギ 「長かったね、古文の授業」

ユキ 「そお？」

ツムギ 「ユキ、ずっと寝てたでしょ」

ユキ 「木村先生すぐ吟じるから、眠くなるんだもん」

ツムギ 「ホントやめて欲しい。あれ、セクハラで訴えたら勝てると思う」

ユキ 「ダメだよ、一応、演劇部の顧問なんだから」

ツムギ 「そっか。全然来ないけどね」

ユキ 「ね、昨日の部活の課題、やった？ 早口言葉のお稽古」

ツムギ 「稽古って、そんなのする必要ある？ 神アニメ神アニメ神アニメ。は

いー！」

ユキ 「(言う)」

ツムギ 「(例) ヨーロッパ旅行者ヨーロッパ旅行者ヨーロッパ旅行者。はい！」

ユキ 「(言う)」

言えた言えないのアドリブなどあって。

リン、本を手に2人に近寄る。

リン 「部活、行かないの？」

ユキ 「リン。いま行くところ。ちょっと待って、一緒に行こ」

ユキ、バタバタとカバンに物を詰める。

リン 「ああ、わたし図書室に寄るから、先出るよ。じゃ、あとで」  
ツムギ 「うん」  
ユキ 「あとでねー」

リン、去る。

ユキ 「さて、あたしらも行きますか」

ユキ、立ち上がるがツムギは座ったまま。

ツムギ 「……………」

ユキ 「どうしたの？」

ツムギ 「…ちよつと今日は疲れたから、休もうかな」

ユキ 「え…どつか具合悪いの？」

ツムギ 「ううん、そういうわけじゃ無いんだけど」

ユキ 「じゃ行こうよ、今日はミーティングもあるって」

ツムギ 「……………」

ユキ 「わたし、書記なんてできるかな。私なんかよりツムギの方がよっぽど字も綺麗だし、まとめられるし。ねえ？」

ツムギ 「……………」

ユキ 「ツムギ？」

ツムギ 「あ、ごめん。(誤魔化して)ミーティングって何話すのかな？」

ユキ 「なんだろうね。初めてのミーティングだもん、私もわかんないけど、  
楽しみ」

ツムギ 「ユキは前向きだね……………」

ユキ 「(笑って)なにそれ。さつ、もう行かなや。部長より遅れて行ったらマズイって」

ユキ、ツムギの手を取って連れて行こうとする。

ツムギ 「え、ちよつと」

ユキ 「はやくはやくー」

ツムギ 「わかった、わかったから〜…」

強引にユキに連れて行かれるツムギ。

転換BGM①

部員たちが机や椅子を持って来て部室へ転換。

② 演劇部部室 会議

ココハ、チアキ、エマエマ、キーク、ハナっちがいる。  
座っているココハがキークをタロットで占っている。

チアキ、ハナっちは一発ギャグを考えている。

エマエマは絵を描いている。

ココハ「キーク、まずこのカードをシャッフルして」  
キーク「こうですか？」

キーク、机の上のシャッフルする。

チアキがハナっちにギャグの振付をしている。

チアキ「右手もつと上げて……こう……それで回転！」

回転で跳ね飛ばされたチアキ。

チアキ「ソーシャルダンス」

ハナっち「……ねえチアキ、これ面白い？」

チアキ「改良の余地はある。なんとか部長に面白いつて認めさせて、コントの

台本を書かせなきゃ」

ハナっち「部長、「演劇命」だから無理だと思うよ」

チアキ「あきらめないで」

ココハ「OK！」

ココハがカードをまとめている。

ココハ「それじゃココハが1枚引くからね」

キーク「お願いします。なるべくいいのを——」

ココハ「しっ！ 集中させて」

チアキ、ハナっち見に来る。

ココハ「……うーうー」

一同 「(緊張)」  
ココハ 「やー！」  
キーコ 「…なにが出ました？」  
ココハ 「(見せて) でしたーっ」  
チアキ 「やばみ！」  
ハナっち 「これ、何のカード？」  
ココハ 「おお…これは……………」  
一同 「(ごくり)」  
ココハ 「知らない」

ガクツと一同、倒れるチアキ。

キーコ 「ちよっとー！」  
チアキ 「新喜劇か！」  
ココハ 「冗談り、冗談です。これはね、ザ・ワールドっていうカード」  
キーコ 「え、世界？ 世界が私の物になるの？」  
ハナっち 「おいおい」  
ココハ 「まあ、簡単に言うたそうということ」  
キーコ 「やったー！」  
チアキ 「簡単だな、世界！」  
エマエマ 「はいはい！」  
ハナっち 「今度は何、エマエマ」  
エマエマ 「絵が出来ました！ 今日(仮に)部長を描いたよ！」  
キーコ 「え、見せて見せて」

一同、エマエマの絵を見て、

エマエマ 「バンクシーを意識しました」  
ココハ 「(感想)」  
ハナっち 「(感想)」  
チアキ 「(感想)」

ユキとツムギが入って来る。

ユキ 「どしたの、みんな」  
エマエマ 「ユキ、ツムギ。見て見てこれ、ボクが描きました！」

ユキ 「わー、すごい」

ツムギ 「エマエマ、これって部長？」

エマエマ 「そうなのです。そしてこれはプレゼントするのです！」

ユキ 「プレゼントって誰に？」

エマエマ 「聖リモネール学園高等男子部の皆さんにです！ ホームページから

応募してねー（などの告知）」

チアキ 「誰に言ってるの？」

キーク 「じゃあ私も、このカードをプレゼントしちゃいます！」

ココハ 「それココハの」

キーク 「だって世界くれるって」

ハナっち 「おいおいおい」

チアキ 「新しいギャグ思い付いた！」

ユキ 「見せて見せて」

わちやわちやがやがや騒がしい演劇部。

リンが入って来る。

リン 「…うわ。なにこれ…：うん？」

振り向くと、部長が沈黙の怒りで立っている。

リン、やばいと思つて咳払い。何度もする。

だんだんと気付いていくが、チアキとユキは気付いていない。

ツムギがユキに何とか報せようとする。

チアキ 「新ギャグいきまーす」

ツムギ 「（小声）ユキうしろ」

チアキ 「何を言われてもドキドキワードに聞こえちゃう思春期の女子。（ユキに）  
あ、スタバはっけーん！ ねえショウタくん、ちよつと寄っていかな  
い？」

ユキ 「そうだなー、こう暑いと、熱中症に——」

チアキ 「ネツチュウシヨウ！？…ネツチュウシヨウネツチュウしよう…：ねえ、

チュウしよお？…」

ユキ・チアキ 「キヤーツ！！」

ハナっち 「（小声）チアキ」

ツムギ 「（小声）ユキやばい、ほんとやばい…」

ユキ 「ねっちゅーしよーって——」

ユキ、振り向くと、部長の顔。

部長 「……………」

ユキ 「……………気を付けないとね…」

部長 「ユキ、チアキ」

ユキ・チアキ 「はい！」

部長 「席について」

ユキ・チアキ 「はい…」

部長 「おはようございます」

一同 「おはようございます」

部長 「創部してから一週間、みんなが仲良くなってきたのは良い事だと思うけど……………部室に入ったら『演劇部』の活動です。休み時間とカン違いしている人は部活動をする資格はありません」

チアキ 「はい…」

ユキ 「すみません…」

部長 「ではミーティングのセッティングをしてください」

椅子や机を出して会議の準備をする一同。  
部員たち着席する。

部長 「ユキ、書記係りお願いします」

ユキ 「は、はい！」

ユキ、黒板又はノートに書記をする。

部長 「第一回リモ女演劇部ミーティングをはじめます。全員いますね？」

一同 「はい」

部長 「最初に、部費についての説明です。創部したばかりということで、学園は予算が下りないと言ってきたのですが、顧問の木村先生と掛け合って、なんとか必要最低限の金額をもらうことができました。部室の備品などはこれを充てます。皆さん、大事に使ってください」

一同 「はい」

部長 「質問が無ければ、次の議題に行きます。演劇部のこれからの活動について、話し合いをしたいと思います」

ココハ 「これからの活動？」



リン 「活動って、芝居をやるんじゃないの？」

部長 「もちろん演劇をやってくわけだけど、いまのように基礎体力、発声練習、ダンス練習、エチュードを繰り返しても、演劇の本質に辿りつくわけじゃない。やっぱり公演をやらなきゃ」

一同 「公演！？」

ココハ 「(ブランクコいで) ギーツギーツ…」

部長 「それはブランクのある公園」

ココハ 「ごめん…」

部長 「教室を借りて、リモ女演劇部の旗揚げ公演を打ちたいの。みんなの意見を聞かせて」

一同、突然の提案にざわつく。

部長 「どう？ 大きな議題だから一人ずつ聞こうかな。まずはチアキ」

チアキ 「私はやりたい！ そんなで前説の担当したいな」

部長 「バラエティーじゃないんだから」

チアキ 「拍手の練習とかやるんだよね。せーの、(叩いて) パンパパン」

部長 「賛成に一票ね」

ユキ 「はい(書く)」

部長 「エマエマはどう？」

エマエマ 「はい！ ボクも賛成です！ お客さんの前でお芝居やるの楽しそう！」

ハナっち 「あたしも！ スポーツに置き換えたら、公演って本番の試合だと思うから、やっぱり練習の成果を發揮したい」

部長 「そうよね。キーコはどう思う？」

キーコ 「うーん、でも、このコロナの状況で公演するの？ それってけっこう大変じゃない？」

リン 「私もキーコに同意かな。公演そのものはとってもいいと思うけど、今やる必要ってあるかな」

部長 「ツムギは？」

ツムギ 「え…」

部長 「子役をやって役者として仕事をしたこともあるツムギは、私たちより広い視野を持つてると思う。意見を聞かせて」

ツムギ 「そんなことないけど…私もリンの考えに近いかな。せっかくやるんだったら、みんなにちゃんと期待されてやりたいっていうか」

部長 「うん…。経験していると、そう考えるのは当然だね。見に来ないだけ

じゃなくて、陰口言われたり、もしかしたら嫌がらせを受けるかも知れない。そんな事、今までだったら考えられないもんね」

一同、暗くなる。

ココハ「そっか…」

チアキ「やりたいけど」

エマエマ「様子見すべきなのかな」

部長「……………」

ユキが、みんなを真剣な目でみている。

ツムギ「…ユキ？」

部長「言いたいことがあるなら、発言して」

ユキ「こうやって、悩んだり話してる間にも、時間は過ぎていく」

一同「？」

ユキ「楽しい時間ってあつと言う間じゃない。はじまったばかりと思ってた高校も、もうけっこう経ってる。私たちの高校生活って思ったより短いかも知れない。この状況がどうなるかは世界中の誰にもわからないでしょ？ だったら、消極的なことはしたくない。最初は失敗しても、次は成功させればいいと思う」

部長「…うん。トライ&エラーの繰り返し。とにかく挑戦しなきゃ何もはじまらないし。公演をやっではじめて『演劇部』。板を踏んで、はじめて『役者』。演劇部と名乗るには公演を経験しなきゃ。よし、絶対公演を打とう！」

一同、頷く。

ココハ「やーっ！」

キーコ「ココハ？」

ココハ、タロットカードを一枚抜き出して掲げる。

ココハ「おお…これは…運命の輪！」

リン「どういうカード？」

ココハ「幸運、成功の暗示だよ！」

「おー！」と喜ぶ一同、笑顔。

部長 「そうと決まったら演目を決めなきゃ。記念すべき旗揚げ公演だからね。名作と言われている戯曲を選ぶか、オリジナルの作品を作り上げるか。みんなはどう思う？」

エマエマ 「はいはい！ ボクはオリジナルの作品がいいと思います」

部長 「エマエマが考えてるの、どんなの？」

エマエマ 「男の子と女の子が入れ替わっちゃって、それで災害を阻止するために雨を降らすんです！」

部長 「却下！」

エマエマ 「えー…」

ユキ、『君の名は天気』と書いて×。

チアキ「エマエマ。パクリはダメ。私はオリジナルテイのあるやつで勝負したい。

特殊能力を持つてるが故に差別されている人たちが集まって、世界を

奪おうとする組織と戦う話！」

ハナっち 「おお」

キーク 「壮大だわ」

リン 「でも…」

部長 「たしかにどの作品って言えないけど…よくある設定すぎて却下！」

ユキ、『まーべる的なの』と書いて×。

部長 「そもそも高校演劇というパッケージを考えてよね」

ココハ 「ココハも考えたー」

部長 「なに？」

ココハ 「幼稚園の園児たちが、夏休みにお泊り会をして成長するの」

キーク 「お泊り会、あったね」

ツムギ 「帰りたいって泣く子いた」

チアキ 「親が迎えに来てね」

エマエマ 「ボクはアニメが見れなくて泣いたの覚えてます」

部長 「却下」

ココハ 「なんでー？」

部長 「みんな幼稚園児役はキツイでしょ」

一同、頷く。

ユキ、『園児× JKでギリセーフ』と書く。

部長 「そもそも園児が成長って当たり前。毎日育ってんだから」

ココハ 「そっかー」

部長 「他にはないの？」

キーコ 「私は青春ラブコメとか憧れるな」

エマエマ 「それ最高です！」

ハナっち 「彼氏役にはリンがいるし！」

リン 「え？」

ツムギ 「うん素敵彼氏」

チアキ 「それアがる！」

部長 「うーん、でもラブコメにテーマ性を入れるの、難しいな…」

キーコ 「恋とか愛はテーマにならない？」

部長 「まあ、高校演劇で恋愛は厳しいかな。やっぱり観た人に何か残る作品を作りたいし。恋愛要素はあってもいいと思うけど、それオンリーじゃ」

ユキ、『恋愛NG!』と書く。

ツムギ 「友情モノとか」

エマエマ 「三銃士がいいです！」

チアキ 「歌いたい」

ハナっち 「殺陣やりたい！」

ココハ 「猫が主役」

リン 「やっぱダンスだよな」

キーコ 「水着になってもいいですよ」

一同 「ええ〜〜〜」

ユキ 「無理無理」

エマエマ 「ボクに需要があるでしょうか？」

聞いていた部長、ひらめく。

部長 「よしイメージ沸いてきた！ 着替えて稽古にします！」

転換BGM②  
部員たちが机や椅子をはける。

③ 校庭

先にジャージに着替えたユキとツムギ。  
ランニングして出て来る。  
その場走りをしてしながら話す2人。

ユキ 「ツムギ遅いよ」  
ツムギ 「…はあ、体育以外で走るなんて」  
ユキ 「校庭3周、すぐだよ」  
ツムギ 「ユキは長距離得意だから」  
ユキ 「置いてっちゃうよ」

その場走りを続けていく2人。と、ツムギが走るのをやめる。

ユキ 「…ツムギ？」  
ツムギ 「……………」  
ユキ 「どうしたの？ どっか怪我した？」  
ツムギ 「ユキ……私、演劇部やめる」  
ユキ 「え？」  
ツムギ 「…ごめん」  
ユキ 「なんで!？」  
ツムギ 「創部するのに9人いるからって、ユキに頼まれて入ったけど、1人減ったからって、もう學園も廃部には出来ないと思う。だから……」  
ユキ 「旗揚げ公演するのに、私たち、お芝居できるんだよ!？」  
ツムギ 「……………」  
ユキ 「ねえ!」  
ツムギ 「だからやめたいの!」  
ユキ 「ツムギ……」  
ツムギ 「ユキには前に話したと思うけど、うちの両親、仲悪いんだ。今、パパが家を出て別居中なんだけど、正式に離婚調停に入るみたいで」  
ユキ 「…そうなんだ」  
ツムギ 「その理由、私なんだ。私が芝居をやらなければ、こんなことにはなつてなかった……」

ユキ 「え？」

ツムギ 「昔は仲が良かったんだよ。小学校3年の頃、児童劇団のワークショップにパパとママと3人で行った。それで入団して、ドラマのオーディションを受けはじめた。最初は「芝居する」とか「仕事」とか全然考えてなくて、友達と一緒に電車乗ってオーディションを受けに行くのが楽しかったの。遠足みたいな気分で。あんまり考えてないから、セリフを覚えるのも苦じゃ無かったし、泣けって言われたら涙も流せた。運良く人気ドラマに出れてCMにもキャスティングされるようになった。急にお金が入ってお母さんは服が派手になった。お父さんは車を買った。生活が変わって、私の仕事の入れ方や教育方針でぶつかるようになって、家ではいつも言い争いをするようになった。私は精神的に不安定になって、セリフが覚えられなくなって……笑うシーンで泣きだしてしまった。そのまま降板。パパとママの仲はさらに悪くなって、そのうちパパは家を出ていった」

ユキ 「……知らなかった」

ツムギ 「お芝居をする、どうしても思い出しちゃうから……。ごめんユキ。部長にはちゃんと説明する。旗揚げ公演、観に行くね」

ツムギ、歩いて行こうとする。

走ってきたリン、2人に気付いて隠れて様子をうかがう。

ユキ 「知らなかったけど、ツムギがお芝居のことを嫌いになったわけじゃないってことは、知ってる」

ツムギ、立ち止まる。

ユキ 「去年の中3の文化祭、演劇公演をやることになって……何もかも知らないことばかりで悩んでた私に、演技論や技術を教えてくれた。「演劇概論」という本も貸してくれたでしょ。最近まで読み込まれて付箋やマークが沢山ついて、ボロボロになってた。お芝居が嫌いなら、あんな風になってるわけない」

ツムギ 「ユキ……」

ユキ 「〃自分のやりたい事やって欲しい〃」

ツムギ 「え？」

ユキ 「これね、妹に言われたんだ」

ツムギ 「なっちゃんに？」

ユキ 「(頷いて) ツムギも会ったことあるから、気付いたと思うけど、ナツは遺伝的な病気を持って生まれてね。介助だったり、薬のお世話だったり、一人じゃ危ないことが多いから、どうしても家族の中心になる。私もいつの間にか自分のことを我慢することが当たり前になってて：小学校でも中学校でも、やりたい習い事とか部活に入りたいって言い出せなかった。今年の春、私はリモ女に入って、ナツの誕生日が近かったから、プレゼントに何が欲しいか聞いたの。そしたら、「お姉ちゃん、あたしの面倒はもう大丈夫だから、高校では、自分のやりたい事をやって欲しい。それが一番うれしいから」って」

ツムギ 「……………」

ユキ 「だから、お芝居をしている姿を妹に見せたい。私が一番やりたい事は、これなんだって」

ツムギ 「…そうだったんだ」

ユキ 「ツムギ、一緒に板の上に立とう。それで、その姿をツムギの両親に見てもらおうの」

ツムギ 「……………うん」

その様子を見ていたリン、去る。

ハナつちを先頭にチアキ、キーコ、エマエマが走って来る。

ハナつち 「リモ女く〜ファイ」

一同 「オッ」

ハナつち 「ファイ」

一同 「オッ」

ハナつち 「リモ女く〜ファイ」

ユキツムギ 「(加わって) オウッ！」

ランニングしながら戻って来る部員たち。全員が揃う。

#### ④ 演劇部部室 稽古

部長 「リモ女演劇部体操〜！」

モニタージュ曲がかかり、体操、ストレッチ、筋トレ。  
明るいダンスとマイムで表現する。

エマエマ「次は発声練習です！」

部長「今日の当番はエマエマね。笑った人には容赦なくデコピンして」  
エマエマ「はい！」

部長「あめんぼあかいな○○○○○！」

部員たち「あめんぼあかいな○○○○○！」

部長「あかまきがみあおまきがみまきがみ」

部員達「あかまきがみあおまきがみまきがみ」

部長「あめんぼあかいな○○○○○！」

部員たち「あめんぼあかいな○○○○○！」

部長「次は外郎売やります。今日は……○○○！」

せつしやおやかたともうすは、おたちあいのうちに、

ござんじのかたも ござりましょうが、

おえどをたつて にじゅうりかみがた、

そうしゅうおだわら いっしきまちを おすぎなされて、

あおもものちようを のぼりへ おいでなさるれば、

らんかんばし とらやとうえもん

ただいまは ていはついたして、えんさいとなのりまする。

噛んだり、間違えるとエマエマにデコピンをされる。

外郎売の間に、机と椅子を出して、部長に演出家席を作る。

日替わり担当「それでは部長、判定はくくく！？」

SEドラマロール

部長「…合格！」

日替わり担当「おめでとうございます！ いまの感想を一言！」

○○○○「感想」



日替わり担当「皆さん拍手！」

(または)

日替わり担当「それでは部長、判定はくらく！？」

### SEドラマロール

部長「…不合格！」

日替わり担当「さんねくん！　いまの感想を一言！」

〇〇〇「感想」

日替わり担当「ということで、罰ゲームです！　はいこの中から選んで」

### 罰ゲーム案　ビリビリペン

得意なモノマネ

変顔など

〇〇〇「選ぶ」

日替わり担当「それじゃいきましょう、どうぞ！」

〇〇〇「罰ゲームやる」

日替わり担当「頑張った〇〇〇に、皆さん拍手！」

部長「はい、それじゃ稽古をはじめます」

一同「はい」

立ち稽古がはじまる。

部長「みんな意見を取り入れて、考えました」

リン「みんなの意見って？」

部長「ツムギから」

ツムギ「え、友情モノとか」

エマエマ「三銃士がいいです！」

チアキ「ミュージカル！」

ハナっち「殺陣やりたい！」

ココハ「猫が主役」

リン「やっぱダンスだよね」

キーコ「水着になってもいいですよ」

一同「ええ〜〜」

一同、部長を見る。

部長「みんなの意見を入れて、私が考えた作品……題して、『リモ女演劇部オ

リジナルミュージカルダルタニニヤンの三銃士ニヤン!』」

一同「…ダルタニ、ニヤン?」

部長「登場人物は全部猫! 歌って踊って戦って、友情努力勝利に切ない恋心、一大冒険活劇の始まりよ!」

一同「わあーっ!」「おおー」

キーコ「水着はないんだ!」

チアキ「なりたいんかい」

エマエマ「需要があれば!」

部員たち、わちゃわちゃ並ぶ。

演出家席に座る部長。

部長「さっそく口立ってでシーンを作っていくからね」

ココハ「口立って何?」

部長「私がセリフを言うから、それを役者がオウム返しに言って、会話を作っていく。基本的には自由に動いていいけど、私も指示を出すから見逃さないように」

一同「はい!」

部長、スマホ(タブレット、PCでも)を押す。

物語が始まるBGMがかかる。

部長「ここは花の都パリ。一匹の凛々しい猫がセーヌ河にかかる橋を渡ろうとしていた」

部長、ユキに合図を出す。慌ててユキが出る。

部長「片田舎から出てきたダルタニニヤンは、初めて見る都会の景色に圧倒

される」

キーコ「ボンジュール」

ココハ「アザブジュバーン」

キーコ、ココハが優雅に通り過ぎる。

部長「なんて素敵な街なんだ」

ユキ「なんて素敵な街なんだ…」

部長「さあ、この紹介状を…ない。さてはさっきの馬車で」

ユキ「さあ、この紹介状を…あれ、ないぞ。さてはさっきの馬車で！」

ユキ、走って行く。

部長「リン、チアキ、ツムギ！」

3人、反対から歩いて来る。

部長「3人は三銃士、ニヤトス（リン）、ポニヤトス（チアキ）、ニヤラミス

（ツムギ）よ」

三銃士、仲良く陽気な態度に変わり、やって来る。

すれ違いざまユキとリンの肩が軽くぶつかる。

リン「おっと」

部長「待ちな」

リン「待ちな、若いの」

エマエマとハナっちは一度袖にはけて、新聞紙を持って来る。

新聞紙を丸めてテープで止めて棒状（剣）にする。

ユキ、振り返る。

部長「何でしょう。いま、急いでいるのです。大事な紹介状を盗まれてしま

い」

ユキ「何でしょう。いま、急いでいるのです。大事な紹介状を盗まれてしま  
ったので」

部長 「チアキ」

チアキ 「田舎もんの猫が、俺たちのことを知らないらしい」

部長 「ツムギ」

ツムギ 「パリの治安を守る銃士隊の中でも、三傑と称される我ら三銃士にぶつかるなんてね」

部長 「三銃士？ 良かった」

ユキ 「三銃士？ あなたの方が？ それは丁度よかった。三銃士のリーダー、ニヤトスさんに渡す紹介状を――」

部長、ハナっちから剣を渡されると、リンに投げる（渡す）。

リン、剣をユキに突きつける。SE 剣の音。

ユキ 「何をする！」

リン 「無礼な野良猫め、礼儀を教えなきゃならんようだ」

ユキ 「（カチン）野良猫とは聞き捨てならない」

部長 「取り消せ！」

ユキ、リンの剣をさばいて逃げると、エマエマから剣をもらう。  
それを見て三銃士たち、剣を構える。

チアキ 「俺たち相手に一人で喧嘩を売ろうってのか？」

ユキ 「そんな気はなかったが、ここまで愚弄されれば致し方ない」

ツムギ 「驚いたね。この青年、本気のようにだ」

リン 「街の治安を乱す不届き者め」

ユキ 「銃士隊だからと威張るのが、この街のルールなのか」

リン 「なに…！」

ツムギ 「…言うね」

部長 「睨み合いから、かっこいい構え！」

リン、ツムギ、ユキはかっこよく構える。

チアキ、大マジメだが様になってない。

部長 「ああ、ちよ、チアキ違っ…動いて…ジリジリ動いて……止まる、殺陣が始まる！」

BGM『偽りの藍』がかかる。

3対1の殺陣シーン。SEカキンカキン!

ユキ 「ハッ！」

チアキ 「小癪な…！」

ツムギ 「ほう、やるもんだ」

部長 「街中の猫たちが集まって来る！」

ココハ 「決闘よ、三銃士が決闘しているわ！」

キーコ 「ニヤトス様あり、素敵」

エマエマ 「おいおい、昼寝の邪魔してくれんなよ」

部長 「エマエマ、あんたがヒロインよ！」

エマエマ 「ええ、ボクが!?…あの御方、一体どなたなのでしょう。なんて凛々しい御姿……」

部長 「いいよ！ 戦闘に巻き込まれる！」

エマエマ 「きやーっ」

ユキ 「危ない！」

チアキの一撃を止めて、エマエマを庇うユキ。

部長 「BGいったんカット！」

BGMカットアウト。

部長 「見つめ合って見つめ合って——エマエマ恥ずかしがる…！」

ユキ 「お嬢さん、お怪我は？」

エマエマ 「……うるうる」

部長 「自分で言うヤツあるか！」

エマエマ 「ごめんなさい」

部長 「わたくしは大丈夫です。はやく、はやくお逃げくださいまし…！」

ユキ 「そうはいきません。正しき世を作る手助けができればと思い、この街へ出てきたのです。このダルタニニヤン、例え勝てぬとわかっていても、相手に背をむける男ではありません」

エマエマ 「ズッキューン」

部長 「ハナっち、わざとらしく横を抜けて。馬車の猫だ！」

ユキ 「おまえは！ 馬車に居た……待て！」

ハナっち、逃げるが三銃士に行く手を阻まれる。

ツムギ 「おまえ…」  
チアキ 「見た事あるぞ」  
リン 「ああ。かつて戦ったことがある。イギリスのスパイ猫だ」  
ハナっち 「くっっ！」

三銃士、ハナっちに剣を向ける。SEキン！

ハナっち 「パリの腰抜けどもめ。邪魔をするなあ！」  
部長 「ユキ！」

ユキ 「待て三銃士たちよ。この猫は私がガスコーニユの領主様に書いてもら  
った紹介状を盗んだ犯人なのだ」

リン 「ガスコーニユの領主…：そうか、おまえが」

ユキ 「その者は私が倒す！」

ハナっち 「ふん、何が三銃士だ。まとめてかかって来いっ！」  
部長 「BG再開！」

BGMカットイン。4対1の戦いだがハナっち強い。

SEカキンカキン アクロ技でSE

ココハ 「ほわー、ハナっちすごい」

キーコ 「さすが元体操部！」

部長 「いいよいいよ…！ ダルタニニヤン、渾身の一撃！」

ユキ 「ハア—ッ！」

SEカキン！

受け止めたハナっちだが、膝をつき剣を落とす。

BGM、FO。

ハナっち 「うう…」

ツムギ 「おおっ！」

チアキ 「やるじゃないか！」

部長 「歓声！」

キーコ、ココハ、エマエマ歓声を上げる。

部長 「ハナっち人質取って！」

ハナっち、隙を見て剣を拾いエマエマを人質に取る。

エマエマ 「きゃあー！」

ハナっち 「よるなよるなあ、この女がどうなっても知らねえぞ！」

部長 「それじゃコンビニ強盗！」

ハナっち 「フランス野郎め、道をあける！」

エマエマ 「いやーっ！」

ユキ 「お嬢さん！」

ツムギ 「卑怯な真似を！」

部長 「リン！」

リン 「ハアッ」

リン、素早く動いて剣を一閃。SEズバーツ

ハナっち剣を落とす。SEカランカラン

腕をおさえてはけるハナっち。

ユキ 「待てっ！」

ユキ、袖まで追うが逃げられる。手には拾った紹介状。

ツムギ 「逃げられたか。それは？」

ユキ 「領主様にもらった紹介状です。今となつては無用の物になりましたが」

ユキ、破こうとする。

リン 「待て」

ユキ 「なんででしょう、決闘の続きをやる気分ではありませんが」

リン、ユキにゆっくり近づく。

チアキ 「おい、ニヤトス…」

ツムギ 「待って。様子を見ましょう」

身構えるユキ。

突然笑いだすリン。

リン 「気に入った、気に入ったぞ青年」

ユキ 「え？」

リン 「紹介状を見せてくれ」

受け取って紹介状に目を通すリン。

リン 「……うん。ガスコーニユの勇敢なる騎士、ダルタニヤン。よくパリに  
来られた、歓迎しよう！」

喜ぶチアキにツムギ、観衆たち。

エマエマ 「ダルタニヤン様、良かった」

部長 「そこに王妃が通りかかる！」

エマエマ 「王妃様！……ってどこ？」

部長 「え、キークは？」

キーク 「私はパリの貴婦人役」

部長 「ココハ？」

ココハ 「ココハは町の占い師」

部長 「あ、ハナっち、ハナっち出て来て！」

ハナっち 「(出て) さすがに王妃の衣装の早替えは間に合いません」

部長 「えーっ！？ じゃあ居ないじゃない！」

一同、部長を見つめる。

部長 「え。え？」

リン 「リオがやればいいんじゃない？」

ユキ 「うん」

チアキ 「そうだよ」

部長 「あたし！？……いや、その……」

ココハ 「エマエマ！」

エマエマ 「はい！」

優雅なBGMがかかる。

エマエマ、部長に近づいて行く。



エマエマ 「王妃様、どうしてこんなところに？」

ロボットのようになり動きで出て来る部長。

部長 「おお、おお…、コンスタンスや…」

一同、唾然として見ている。口をパクパクさせる部長。

部長 「……………」

ユキ 「え、王妃っておばあちゃんなの？」

BGMカットアウト。

一同、笑い出す。

部長 「あたし緊張しいなの…。だから出たくなかったのに…もう休憩！

休憩に入ります！」

一同 「はい！」

部長、そこから飛び出して行く。

一同、緊張が解ける。BGMがかかるなか、

水筒やペットボトルを飲んだり寛ぐ。

ココハ 「お芝居って難しいんだね。リオ、あんなに色々できるのに」

チアキ 「うんうん。こんなだった」

チアキ、真似して歩く。

笑うキーコとエマエマ。

キーコ 「ココハは、部長と幼馴染ですよね？」

ココハ 「そうだよ。リオは小っちゃいころから演劇ラブな子でね。小学校の学芸会で、先生の書いた台本にダメ出ししてたよ。なんで木が喋るんですか！って」

エマエマ 「部長らしいです」

キーコ 「その学芸会には出たの？」

ココハ 「出たよ。その木の役やった」

一同、「あー、それなら」など笑う。

ココハ「それでリオが書き直したの。木が喋るところは、その木に住んでる妖精さんが代わりに喋るっていう設定にした」

チアキ「へえ。ココハは何の役だった？」

ココハ「ココハは魔法使い。黒魔術とか調べてるうちにタロット占いにハマっちゃったの」

エマエマ「魔法使いですか、むむ、難しそう」

ココハ「それがね、ココハもよくわかんないんだけど、なんか憑依した？みたいで」

エマエマ「憑依！？」

ココハ「ココハの体質なのかな。でも、演劇部に入るなんて思わなかった」

チアキ「部長、かなり強引だったもんね」

ココハ「リオの強引はもう慣れっこだよ」

キーク「いいお友達ですね」

チアキ「ね、聞いていい？ キークって雰囲気お嬢っぽいけど、何で演劇部に入るうと思っただの？」

キーク「うーん、実はね、私、グラビアモデルをやってた」

チアキ「えっグラビアモデル？」

エマエマ「すごいです！ うらやましいです、需要があつて」

キーク「エマエマも絶対あるよ」

エマエマ「供給量増やしますー」

ココハ「キーク、どうやってモデルさんになったの？」

キーク「歩いてたらスカウトされて。ちょっと自分を変えてみたいなって思ったのがきっかけ。でも学園にバレたら大変だから、隠れてやっているの。ナイショにしてね」

ココハ「もちろんだよ」

キーク「演劇部に入ったのはね、高校生活を学校とお仕事で終わっちゃったら寂しいよってグラビアの先輩に聞いて、なるほどそうだなーって思ったの。高校生活で部活が一番頑張ったって、いつか言えたらいいな」

一同、頷く。リンとハナっちが袖から戻ってくる。

リン 「へー、体操部だったの。あんなことまで出来るのに、どうして続かなかったの？」

ハナっち「体操って練習も試合もけっこう地味だから。踊るのは好きなんだけど、ダンス部じゃ筋肉質すぎる体型だし」

リン「それで演劇に」

ハナっち「でも、さっきみたいに褒められたら、体操やってて良かったな〜って。何が役に立つか、わかんないよね」

リン「そうだね…。ちゃんとやってる人は、やっぱり報われるんだよ」  
ハナっち「？」

リン「あ、ごめんワケわかんないこと言って」

ハナっち「ねえ、リンって女子部にフアンクラブがあるんでしょ？ 他校の生徒も入ってるって聞いたけど、フアンミーティングとかするの？」

リン「やんないやんない！」

ハナっち「あ、ティックトックとか」

リン「やってないよ。フアンクラブなんて面白がってやってるだけでしょ」  
ハナっち「そうかなあ。でもさっきのリンのお芝居、すごい華があったよ。

見ててワクワクした。人を惹き付けるって、こういうことなんだなって思った」

リン「……ありがとう。ハナっちの動きも凄いのよ」

ニッコリ笑うハナっち。

明かりが変わり、ツムギ、作業したり話したりしている演劇部の仲間たちをゆっくり見ている。

ツムギ「ユキ、頑張ってたね」

ユキ「いきなりダルタニニヤンなんて、びっくりした」

ツムギ「私も」

ユキ「殺陣って難しいな…。小道具は軽いから、どうしても手だけで振っちゃう」

ツムギ「そうだね。実際に重さがある物で練習するといいよ。フライパンとか」

ユキ「なるほど、家でやってみる！ ね、リンの殺陣、カッコ良かったね」

ツムギ「うん、華麗だった。…やっぱりお芝居って楽しいな……ユキ」

ユキ「うん？」

ツムギ「…あ、いや…なんでもない。あ、部長来たよ」

部長、タオルで汗を拭きつつ戻って来る。

部長「稽古、再開します」

一同 「はい！」

BGMがかかる。

部長 「こうしてダルタニニヤンと三銃士は同じ行動をするようになり、共に戦い、友情を深めていった。とくに、三銃士の中でも一番若く、知恵者のニヤラミスとは親友になった」

歩いて来るユキとツムギ。

途中、リンが出て来て2人に気付くが、話を聞いて声はかけない。

ツムギ 「ダルタニニヤン、そろそろ銃士隊に入ったらどうだ？」

ユキ 「銃士隊に！？……いやニヤラミス、それはいけない。君やニヤトス、ポニヤトスの推薦があれば、きつとすぐにでも入れてくれるだろう。でも、それは私の嫌いな不平等というものだ。銃士隊の正規試験は春。私は、自分の力で試験に合格しないと、自分自身を誇りある銃士とは認められないんだ」

ツムギ 「…君らしいなダルタニニヤン」

ユキ 「それに、銃士隊のなかには枢機卿派の連中がいる」

ツムギ、歩みを止める。

ユキ 「三銃士の王妃への忠誠は有名だから、私が君たちと……ニヤラミス？」

ツムギ 「ダルタニニヤン、ありがとう」

ユキ 「なんだい急に」

ツムギ 「君に会う前、私は銃士隊を辞めようと思っていた。私は信仰を大切にしているから、国王派と枢機卿派がいがみ合う今の銃士隊にうんざりしていたんだ。この剣を持っているだけで、その事を思い出してしまふ。だから剣を捨てようと思っていた」

ユキ 「そんな君ほどの剣士が！」

ツムギ 「だが、君の行動を見ていて、考えを改めた。私はやっぱり剣が好きだ。銃士隊の仲間が大好きだ。その事に気付かせてくれて、ありがとう」

ユキ 「……………」

リン 「いい友情だな」

ツムギ 「ニヤトス…」

リン 「私はいいい仲間、そして友を持った。これからも、よろしくな」

部長 「チアキ」

チアキ、走って来る。

チアキ 「三銃士とダルタニニヤンの友情は、永遠だ！」

部長 「有名なセリフ！」

リン 「誓いを立てよう。それぞれの、剣に」

ユキ 「うん！」

チアキ 「まかせろ！」

ツムギ 「想いを合わせよう」

4人は剣を掲げて1つに交わる。SEカシヤン

4人 「皆は一人の為に、一人は皆の為に！」

勇ましいBGMがかかる。

部長 「さあ、ラストバトルへ向けて歌おう！」

4人 「え？」

BGMカットアウト。

リン 「歌って、どんな？」

ツムギ 「歌詞は？」

チアキ 「(ラップ) ♪おれたち三銃士、見た目を超重視、餃子の王将マジシュー  
シー、顧問は四十四、旅行は中止YOYO、YOYOYO！」

一同 「♪YOYO、YOYOYO！」

チアキ 「♪カモ！ YOYO、YOYOYO！」

一同 「♪カモ！ YO―…」

部長 「やめろーっ！ そんなんじゃない！」

一同、止まる。

部長 「(肩で息) ハアハア…」

チアキ 「だってYOU、歌えってYO」

ユキ 「そうだYO」

部長 「…ユキ、チアキ」

ユキ 「あ」

部長 「調子に乗らない！」

ユキチアキ 「すみませーん」

頭を下げるユキとチアキ。

部長 「それじゃ歌は後で考えるとして、ラストバトルへ向かうシーンを作つていきます」

一同 「はい！」

部長 「まず、紹介状を奪った謎のスパイがコンスタンスを誘拐する！」

ハナっち、エマエマを捕まえる。

ハナっち 「娘、大人しくしやがれ！」

エマエマ 「またボクですか！？ あーれー」

ハナっち 「こっちへ来い！」

部長 「上手袖にはけて」

エマエマ 「たすけてーダルタニニヤーン」

ハナっち、エマエマを連れてはける。

エマエマ、スケッチブックを落とす。

部長 「駆けつけたダルタニニヤーン！」

ユキ、スケッチブックを拾う。

ユキ 「これは、彼女の絵…！」

部長 「正面向いて！ 自分の心情を語るダルタニニヤーン…！」

ユキ 「なんて素敵な絵なんだ。こんなにも綺麗に私を描いてくれるなんて。コンスタンス、すまない私のせいで…。奴らの陰謀に巻き込んでしまった。もう誰にも悲しい想いはさせない。必ず君を助け出す。私一人で…！」

部長 「はいストップモーション！」

ユキ、止まる。

部長 「リンとキーコのお忍びデート。明かりを夜にしてください」

暗くなる。SE鼻の鳴き声。

顔を隠したキーコが走ってきて、リンの胸に飛び込む。

リン 「誰にも見られていないかい？」

キーコ 「ええ、見られていないわ。もし、あの人に知られたら大変なことになつてしまう」

リン 「…奴の話はよそう。それより美味しいチュールでも食べにいこう」

キーコ 「うれしい」

部長 「物陰から枢機卿、ニヤシユリユーが見てる！」

一同、顔を見合す。

ココハ 「リオ、誰がニヤシユリユーなの？」

部長 「あー…、ココハ、ココハやつて！」

ココハ 「ココハが？ そんな人知らないし」

部長 「大丈夫、あんたならできる！」

部長、ココハの眼鏡を取る。

ココハ 「あー…」

部長 「ココハはフランスの枢機卿ニヤシユリユーよ。いい？」

ココハ、フラフラとして、何かが憑依する。

ココハ 「…おお、我が愛しのミレディー…なぜそんな男に！」

部長 「よし！ 1回はけて」

エマエマ 「これが憑依なんですね！」

チアキ 「ココハすげーっ！」

部長 「ユキ、動いて」

ユキ、リンとキーコの前を通り過ぎる。

リン 「…いまのはダルタニニヤン？」

キーコ「どうなさったの、ニヤトス様」

リン「すまないミレディー。かけがえのない友が、思い詰めた顔をして通り過ぎたのだ。私は見過ごすことができない」

キーコ「ニヤトス様……私よりご友人の方が大切なんですね」

リン「……………」

キーコ「なんとか仰って」

リン「…すまない」

キーコ「あつ……………」

リン、ユキを追って行く。キーコ、去る。

リン「ダルタニニヤン待て！」

ユキ「ニヤトス…。なんだいこんな夜更けに」

リン「君こそ怖い顔をしているぞ。どこへ行くつもりだ？」

ユキ「……………」

リン「答えられないのか。ならばついて行こう。なあ友たちよ」

ユキ「え？」

チアキ、ツムギが出て来る。

チアキ「その通りだ」

ツムギ「大方、人質を取られて一人で敵地へ乗り込もうとしてるんだろう」

ユキ「ニヤトス、ニヤラミス」

チアキ「水臭いぞ」

ユキ「だが、私のために君たちまで危険な目に——」

ツムギ「この剣に誓いを立てただろう。皆は一人の為に」

リンチアキ「一人は皆の為に！」

ユキ「……みんな、ありがとう」

部長「一人帰るミレディー、そこへ忍び寄る影……！」

ココハ「おのれミレディーッ！」

ココハ、剣を手に走って来て、キーコを刺す。

SEグサツ。

キーコ「…あ」

エマエマ「悲鳴」



リン 「ミレディー!? (駆けつけ) しっかりしろ…!ミレディー私だ、わかるか?」

キーコ 「……ニヤトス…様…:ああ…最後に来てくださった…:…」

リン 「死ぬな! ミレディー」

キーコ 「…うれ…しい…: (絶命)」

リン 「ミレディー!」

チアキ 「おのれニヤシユリユー!」

ツムギ 「お前が黒幕なのはわかっているぞ、枢機卿!」

ココハ 「フハハハ…:…」

部長 「ハナっち!」

ハナっちがエマエマを人質に現れる。

エマエマ 「ダルタニニヤン様!」

ユキ 「コンスタンス!」

ハナっち 「枢機卿、こいつらは知りすぎました。生かしてはおけません」  
ココハ 「そうだな。…やれ!」

BGMバトル曲。

ハナっち、ココハとユキ、リン、ツムギ、チアキの殺陣。  
死体のキーコをよけながら戦う一同。

部長 「キーコ邪魔!」

キーコ 「(起き上がって) はい!」

キーコ、四つん這いで去る。

ココハとハナっち、2対4だが強い。

部長 「スローモーション!」

BGMカットアウト。

SEスローモーションの音。

ココハとハナっちの連携プレーで、チアキを斬る。

SEバシユ (バシユバシユバシユ…:)

部長 「解除!」

BGMが再開。

チアキ 「うあああッ！！」  
リン 「ポニヤトス！」

腕を斬られたチアキを介助するリン。

ツムギ 「ダルタニヤン、こいつら強い…！」  
ユキ 「ああ。だが、背を向けるわけにはいかない…！…行こう！」

BGMに合わせた4人の殺陣ダンス。  
途中からなぜか部長も加わる。

ツムギ 「いまだ、ダルタニヤン、行けーっ！」  
ユキ 「おおおっ！！」

SEドーン！  
ユキ渾身の一撃がハナつちを斬り倒す。

チアキ 「我ら三銃士の剣、受けるがいい！」  
ツムギ 「枢機卿ニヤシユリユー！」  
リン 「いざ、覚悟お！」  
ココハ 「うわあああー」

SEズバーン！  
三銃士の剣がココハを貫き、ココハ倒れる。  
BGM明るい曲がかかり、ゆっくりと暗転していく。  
音量が上がり、明転。  
部長は演出家席に座り、部員たちは地面に座っている。

部長 「じゃあダメだしをします」  
一同 「はい！」

メモを取る部員もいる。

部長 「ユキ、殺陣の精度をあげて、見せ方を鏡を使って稽古すること」  
ユキ 「はい！」  
部長 「ツムギは殺陣やダンスで遠慮しがち。もっと前出ていいよ」  
ツムギ 「はい」  
部長 「キークはリンに、あまりいちやいちゃいしないように」  
キーク 「あら、してます？」  
リン 「してますしてます」

笑う一同。

部長 「エマエマ」  
エマエマ 「はいです！」  
部長 「もうちよつと絵をうまく描いて」  
エマエマ 「ぐはっ」  
部長 「とくに私の似顔絵ね」  
エマエマ 「練習しますー」  
部長 「よし、それじゃ今日の稽古はこれで取ります」  
一同 「はい！」

全員、立ち上がる。

部長 「最後にいい？」  
一同 「？」  
部長 「思うんだけど、私たちが演劇をやったって世界は変わらないし、いまの状況が急に良くなるわけでもないじゃない？ それどころか、迷惑だ、自分勝手だつて、知らない人は無責任に言うかも知れない。でも、今だからこそ、私たちの今を見てもらいたいと思ってるんだ。今は一瞬。その一瞬が無限の未来の可能性に繋がっていく。どうせ世界は変わんないと諦めちゃったら、自分たちも絶対に変わらない。それだけは忘れないようにしよう」  
一同 「はい！」  
ユキ 「部長、締めの方陣やりましょう！」  
ツムギ 「やりたい！」  
一同 「いいね！」 「こっちこっち」 など口々に

一同、輪になり。

グッと近づくが、チアキが止める。

チアキ「だめだめ、ソーシャルディスタンス！」

少し離れて円陣を組み直す部員達。

部長 「…よし、いくぞ」

一同 「おっ！おっ！」

部長 「て言ったら、掛け声ね」

ガクツとする部員たち。

チアキ「新喜劇かーい！」

ハナっち「もー」

部長 「ごめんごめんお約束を一回やってみたくて。(息を吸って) さ、準備は

いい？」

一同 「はい」

部長 「よしいくよ。……リモ女演劇部ーっ！」

全員 「活動ちゅー！！！！」

鐘の音のイントロから、オリジナルエンディング曲がかかる。  
歌とダンス。

### ⑤ 校庭 下校風景(夕方)

SE ひぐらしの鳴く声。夏の夕暮れ。  
部員たちがぞろぞろと下校している。

ココハ 「はー、いっぱい動いたからお腹へったあー」

チアキ 「じゃあ餃子の王将行かない！？」

ココハ 「行かなーい。ココハおうちで食べる」

部長 「チアキ、買い食い、寄り道は校則違反」

チアキ 「はーい」

エマエマ 「部長、先生みたいです」

キーコ 「ふふ、ほんと」

部長 「えーやめてよ」

ハナっち「先生！ 小道具制作のために百円ショップに寄ってもいいですか？」  
部長「それは部の活動だから、もちろんOK」  
ハナっち「エマエマ、衣裳素材も見にいきましょう」  
エマエマ「はい！ ついでにアニメイトも行くです」  
部長「それはダメ」  
エマエマ「うー」  
ハナっち「それじゃ」  
エマエマ「また明日です！」

一同口々に「バイバイ」「またねー」「さよなら」など。  
ハナっちとエマエマ、去って行く。  
バス停になる。SE遠くのクラクション。

ココハ「バス、ちよっと待つねー」

リン「うん」

チアキ「部長！」

部長「ん？」

チアキ「私たちにコント書いてください！」

部長「だから私は放送作家を目指してるわけじゃ——」

チアキ・キーコ「お願いします！」

部長「…え。キーコ？」

キーコ「チアキとコンビを組んで天下を取ります。ね、ココハ」

ココハ「うーん、天下じゃなくて世界だけど。でも、多分とれるよ！」

チアキ「やっぱ簡単だな、天下。よし、まずはM1だ！」

ユキ「すごい、チアキ」

ツムギ「それって誰でも出れるんでしょ。みんなで予選見に行こうよ」

リン「いいね。でも、今年はもう1回戦はじまっちゃったみたいよ」

キーコ「あら」

チアキ「えーっ！？」

キーコ「じゃあ…、コンビ解散ね」

チアキ「ええっ、うそーん…！ ココハあり、天下とれるって」

ココハ「やーっ！」

ココハ、タロットカードをひくと、塔。

ココハ「あ、塔だ」

チアキ 「塔？」  
ツムギ 「なにそれ」  
キーク 「どんな意味なんです？」  
ココハ 「簡単に言うと、一番悪いカード」  
チアキ 「やばみざわ！」  
キーク 「まあ」  
部長 「芸人は諦めろってことじゃないの？」  
チアキ 「そんなあ…」  
ユキ 「チアキ、今回は、ってことかも知れないよ」  
ツムギ 「そうだよ。来年がなければいいじゃない」  
チアキ 「じゃあツムギ、コンビ組んで」  
ツムギ 「えー？」  
チアキ 「部長、新コンビ結成しました！ 見てください、チアムギのショート  
コント！」  
ユキココハキーク (M1出囃子) ♪エセギヤリギヤリギヤリギヤリギヤ  
リギヤリギヤリギヤー！」  
部長リン ♪オオーツ、オオーツ…ジャン」  
チアキ 「ショートコント『ソレナ女』。ツムギ学食行こ」  
ツムギ 「ソレナ」  
チアキ 「んくパスタランチにしよう。ツムギは？」  
ツムギ 「ソレナ」  
チアキ 「うちショウウタ君にコクられて困ってんだよね。どうすればいい？」  
ツムギ 「ソレナ？」  
チアキ 「あ、ショウウタ君、こっち友達のツムギ」  
ツムギ 「はじめまして」  
チアキ 「そこはソレナでしょ」  
ツムギ 「ソレナー」  
チアキ 「やめさせてもらおうわ」  
チアキツムギ 「ありがとうございます！」  
ユキ (拍手) すごくいい面白かった！」  
チアキ 「やった！ チアムギで天下を目指そう！」  
ツムギ 「えー」  
キーク 「きつといけます！」  
リン 「部長が書いた方が面白いと思うけど…」  
部長 「ダメよ、ダメダメ」  
ユキツムギ 「それ、なつかしい！」

ココハ「あ、バス両方来た」

SEバスの止まる音。

ココハ「キークコ乗り遅れるよ」

キーク「はい。チアキ」

チアキ「あ、待ってよー！」

ココハ「リオ、みんなバイバイ！」

一同口々に「バイバイ」「またねー」「さよなら」など。

ココハ、キーク、チアキ別のバスに乗って去る。

ユキ、ツムギ、リン、部長、一度はけてバスに乗り込む。

⑤ バス車内

SEバスの発車音。つり革を持つ4人。

つり革を使ったダンス。

部長「…ユキ」

ユキ「はい？」

部長「ストーカーじゃなかったね」

ユキ「(笑って)だから違うって言ったでしょ」

リン「ストーカー？なんだっけ、それ」

ユキ「2週間ぐらい前かな。部長が演劇部立ち上げようってチラシとか配って部員集めてたとき、声かけたかったんだけど、私、人見知り発動しちゃって」

ツムギ「いつも隠れて見てたら部長にカン違いされて」

部長「いや普通に怖いでしょ。どこ行っても居るし何も言わずジーツと見てるんだから」

リン「あー、そうだったね」

部長「でも…ユキがツムギを呼んでくれたから創部できた。…まあ一応礼は言わないとね…ありがと」

ユキ「…部長っ！」

部長「な、なによ、なんで涙目に…やめてよほんと…！」

アナウンス「楽園の女王様、楽園の女王様」

SEバスがキキーツと停まる。

部長 「あ、着いた。降ります、降ります（出る）」

ユキ 「あ！ 部長、さよならー！」

ツムギ 「また明日」

リン 「お疲れさまー」

あっかんべーして部長、去る。

再びバスが動き出す。SEバスの中。

静かな間。揺れる3人。

リン 「…ツンデレ部長め」

ユキツムギ 「(笑う)」

リン 「…でも、私もユキとツムギには感謝だな」

ユキ 「え？」

ツムギ 「どういうこと？」

リン 「お芝居には興味あったんだけど、なんか周りに「やっぱり」って思われるの嫌だったし。部長に強引に入部させられたけど、すぐやめようと思ってたの。…バカだよ、人の目ばっか気にして。今までずっとそうだった。自意識過剰で何にも真剣に向き合ってこれなかった」

ユキ 「…リン」

リン 「ユキとツムギを見てたら、いいなーって。私も、もう格好つけるのやめる」

ユキツムギ 「……………」

ユキとツムギ、顔を見合わせる。

ツムギ 「でもでもでもでも」

ユキ 「リンは華麗で格好いい！」

ツムギ 「ソレナ」

リン 「(笑って) ひどーい」

アナウンス 「純血の女王、純血の女王」

リン 「着いた。じゃあね」

ユキ 「うん！」

ツムギ 「リン、明日殺陣を教えてね！」

リン 「一緒に稽古しよう」



ツムギ 「うん！」  
ユキ 「ばいばーい！」  
ツムギ 「ばいばーい！」

リン、去って行く。  
SEバスが発車する。

ツムギ 「…動き出したね」  
ユキ 「うん。動き出した」  
ツムギ 「これから色々あるんだろうなー」  
ユキ 「色々あるよ、きつと」  
ツムギ 「…同じことしか言ってるない」  
ユキ 「だってツムギが先に言うんだもん」  
ツムギ 「じゃあ、ユキから話して」  
ユキ 「そう？…じゃあ改めて」  
ツムギ 「え？」  
ユキ 「これからもよろしくね、ツムギ！」

ED曲がかかる。  
2人がキャストを呼び込んで、カーテンコール。

(終わり)